

「使徒たちに対する迫害 3」

2016年03月22日

使徒言行録 5章 33節～42節。これを聞いた者たちは激しく怒り、使徒たちを殺そうと考えた。ところが、民衆全体から尊敬されている律法の教師で、ファリサイ派に属するガマリエルという人が、議場に立って、使徒たちをしばらく外に出すように命じ、それから、議員たちにこう言った。「イスラエルの人たち、あの者たちの取り扱いは慎重に下さい。以前にもテウダが、自分を何か偉い者のように言って立ち上がり、その数四百人くらいの男が彼に従ったことがあった。彼は殺され、従っていた者は皆散らされて、跡形もなくなった。その後、住民登録の時、ガリラヤのユダが立ち上がり、民衆を率いて反乱を起したが、彼も滅び、つき従った者も皆、ちりぢりにさせられた。そこで今、申し上げたい。あの者たちから手を引きなさい。ほうっておくがよい。あの計画や行動が人間から出たものなら、自滅するだろうし、神から出たものであれば、彼らを滅ぼすことはできない。もしかしたら、諸君は神に逆らう者となるかもしれないのだ。」一同はこの意見に従い、使徒たちを呼び入れて鞭で打ち、イエスの名によって話してはならないと命じたうえ、釈放した。それで使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て行き、毎日、神殿の境内や家々で絶えず教え、メシア・イエスについて福音を告げ知らせていた。

最高法院の議員たちは、使徒たちの主イエスは死者の中から復活したという宣教を何としても止めさせたかった。最高法院の権威で脅したけれども、使徒たちは「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません」と答え、自分たちは主イエスの復活の証人であり、聖霊も証ししていると臆することなく証言した。証言を聞いた議員たちは激しく怒り、使徒たちを生かしておくことはできないと考えた。怒りと殺意が頂点に達した時、律法の教師で、ファリサイ派に属するガマリエルが立ち上がった。彼は民衆から深く尊敬されていた。使徒言行録 22章 3節に、パウロは「この都で育ち、ガマリエルのもとで先祖の律法について厳しい教育を受け」た者であると書いている。パウロはガマリエルに師事していた。ガマリエルは使徒たちを退廷させて、議員たちに「イスラエルの人たち、あの者たちの扱いは慎重に下さい」と呼びかけた。そして、過去に起こった二つの事件について語っている。テウダという男が自分を偉い者のように言いふらし、400人くらいの人々が従ったが、彼は殺され、従った者たちも散らされ、跡形もなくなった。ガリラヤのユダも民衆を率いて反乱を起したけれども、彼も滅び、従った者たちもちりぢりになった。「そこで今、申し上げたい。あの者たちから手を引きなさい」と続けた。人間が起こした計画や行動なら自滅していく。神から出たものであるなら、彼らを滅ぼすことはできない。最後に「もしかしたら、諸君は神に逆らう者となるかもしれないのだ」と締めくくった。ガマリエルは穏健で、良識的な主張をし、復活を否定するサドカイ派に対立する立場から、使徒たちの復活宣教に好意的な態度を表明したと言えよう。彼の主張は、一同の賛意を得た。使徒たちは呼び戻され、鞭打たれ、イエスの名によって話してはならないと命じられ釈放された。彼らは、主イエスの名のために辱めを受けたことを喜んだ。パウロの信仰と同じように、十字架の苦しみに与ったことを誇りにしたのである。

最高法院から出て来た使徒たちは神殿の境内や家々で、毎日教え続け、メシアである主イエスの福音を告げ知らせた。